

基調講演

古代山城の成立と変容

講演者紹介

亀田 修一（かめだ しゅういち）

九州大学文学部卒業。九州大学大学院文学研究科修士課程修了。大韓民国忠南大学校留学。岡山理科大学助教授を経て、現在、岡山理科大学生物地球学部教授。専門は考古学。博士（文学）。

「古代山城の成立と変容」

岡山理科大学教授 亀田 修一

おはようございます。岡山理科大学の亀田でございます。今日はよろしくお願いいたします。一時間ほどということですので伺っています。

「古代山城の成立と変容」という題目ですが、事務局側から、こういうお話で、総論的ということをして伺いまして、そのまま今回のシンポジウムのテーマを題目に使わせていただきます。僕のあとに、仁藤先生、赤司先生、向井先生が中身の濃いお話をされますので、総論としての大まかなお話をさせていただきたいと思っております。

一・はじめに

さて、今日のお話ですが、まず、「朝鮮式山城と神籠石系山城」の違いについて簡単にお話しします。それから、総論ではあるんですが、全く今まで言われている話をそのままとめるだけでは面白くないと思ひまして、僕自身がここ数年研究してまいりました内容をちょっと付け加えてお話しさせていただきます。



ます。

一つが、ここにあります「未完成と完成」というテーマです。これは、何年前だったでしょうか、この一連のシンポジウムの一つの回が東京国立博物館であった時に一度お話しさせていただきました。古代山城、いわゆる朝鮮式山城は大体できあがっていると思います。しかし神籠石系山城と言っているものに関しては、以前から言われているんですが、かなりのものができあがってないんじゃないだろうかということです。このような見方で検討しますといういろいろ違った見方ができるのかなというお話を以前させていただきましたが、今回もちよつとそのようなお話をさせていただきます。

それから、この三番目の「遺構と遺物の検討と総合化」。鞠智城の立派な報告書が数年前に出されていますが、その中で、今日も来られています矢野さん、それから、土器のほうを検討された木村さんたちが素晴らしい成果を挙げられています。その後、このような視点でほかの古代山城を見ていくとどのような感じだろうと思います。僕自身もやり始めました。遺構という構造物、それから遺物という土器などのものを個々に検討した上で総合化すると、いろいろ見えてくるんじゃないだろうかと思っています。

特に今回は、古代山城の土塁を築く時に、一層一層積み上げていく版築という丈夫な土塁の築き方について少しお話ししたいと思います。ここに書いています「堰板」という、枠の板を使って土留めをしていると僕たちは習ってきました。しかし、実は、よく見てみるとそうでもない、よく分からない部分があるんだと、あらためてわかってきました。今回は、ちよつとそのような新しいねたも少し含めながら、古代山城の成立

す。あとでまた向井さんのお話にも出てくると思いますが、「ここどこが違うから確実に分かれるよ」という話にはどうしてもなりづらいのです。同じ古代の山城の中でグループが違うというぐらいのものなんです。その違いをどう理解するかによってグルーピングのしかたが変わってきます。それで、ひとまずの話として現在定着している分け方ですが、『日本書紀』であるとか、『続日本紀』などの記録に名前が出てくるも



図1 日本の古代山城（総社市2005）

と変容についてお話を進めていきたいと思っています。

まず、これはよく皆さんがご覧になれる分布図なんです(図1)、ここが高安城です。ここから大体西側の地域、瀬戸内海沿岸地域から北部九州に広がっています。ここであとと見にくいんですが、赤い丸が神籠石系山城、それから三角が朝鮮式山城といわれているものです。記録にある鞠智城もこの朝鮮式山城に含まれますが、大体こういう分布状況になっております。

そこで、朝鮮式山城と神籠石系山城というのは何が違うんだという点について少しお話ししま

のを朝鮮式山城と呼んでいます。例えば、水城は朝鮮式山城に入れるかどうか悩ましいですが、大野城、椽城（基肄城）、それから金田城、屋嶋城、高安城。そして、六九八年の繕治、修繕でいいと思いますが、鞠智城が加わります。これら以外にここに載っています、備後の国、広島県南東部の茨城・常城があります。

この二つの城は築城記事や繕治記事は出てこず、城の停止記事だけがでてきます。

それから、記録にはみられません、考古学的に確認されているものがあります。山の上に土塁や列石が確認されているものです。もともとは列石が目玉されていました。筑後の高良山や筑前の雷山、そして周防の石城山などで、このような山城が北部九州を中心に確認されていて、ひとまず神籠石系山城と呼ばれています。

これらの大きな特徴は、記録が見られないことと、切石の列石です。北部九州の場合、きれいに加工した石をずっと列に並べています。この列石が神籠石の名前の元になったといわれています。ただもともとは別のものが神籠石と呼ばれたと向井さんが述べられています。いずれにしても列石が大きな特徴で、その列石がちょうどお宮さんの範囲を囲んでいるものが高良山や石城山の神籠石で見られます。というわけで、この列石は神域、神のエリアを囲うものだという説があります。いや、そうじゃなくて、これは朝鮮の類例と比較をすればやっぱり山城なんだという説があります。それで有名な神籠石論争になるわけです。そして、九州大学の鏡山猛先生や小田富士雄先生たちが発掘調査をされて、土塁があることが確認されました。さらにその土塁に版築を使っていることが明らかになり、朝鮮式山城と同じようなものなんだろうと考えられるよ

うになりました。

こうして調査が進んできますと、瀬戸内側では切石ではなくて加工した石、割石、そのままの石を使っているものがわかってきて、ちょっと多様な様相が見えてきます。このようにこのグループの山城は「列石」が一つのキーワードになってきました。それから「版築土塁」、そして、もう一つが、城内に建物がどうも見つからないということです。一部あるものもあるんですが、基本的に見つかりません。大野城などの朝鮮式山城では、あとで赤司さんからお話が出てくると思いますが、たくさんの倉庫群があります。そういう意味で、やはり違いはあるわけです。ただし、きれいに割り切ることができません。そういう微妙な違いもご理解いただいた上で、次のお話に進みたいと思います。

二・ 未完成と完成

僕自身、神籠石等の発掘調査に主体的に関わったことはございません。学生時代、韓国に留学にして、韓国の山城はほんの少し発掘したことがございますが。日本の古代山城は、城壁の長さが大体二キロ前後で大きいです。韓国の場合、百済地域ですと一〇〇メートルクラスから、九〇〇メートル台ぐらいまでの幅の中にあります。王城といわれている、王様がいた公山城とか、扶蘇山城ですと大体二キロ台です。そういう意味で言いますと、日本の神籠石や朝鮮式山城もそれぐらいの大きさですのでかなり規模の大きいものということになります。

そして、大野城とか、基肄城などは城壁にそって回っていきますと、城壁がちゃんとあります。基本は土塁で、一部石垣の城壁があるところがあります。神籠石系のものですと、ほんとうに石垣とか土塁が回っているのかというと、岡山県の備中鬼ノ城と福岡県の豊前御所ヶ谷神籠石の二カ所だけはいいだろうと思いますが、きちんとめぐっていないものが意外に多そうです。朝鮮式山城の香川県の屋嶋城、上部の城壁は自然の地形を使っているようですが、少し下の方にある浦生石塁^{うみ}というところは、今注目されて発掘調査もされているんですが、この付近はどうも未完成のようです。

このように、古代山城にはそれなりに未完成のものがあるのではないかという視点で、神籠石系の山城を見ていきますと一六遺跡中、豊前唐原山城跡や筑前阿志岐山城跡など、少なくとも六遺跡は未完成と考えるを得なくなってきました。

そして、それらの価値付けといいますが、そのような視点で、完成したお城を見ていくと、大野城や基肄城などは、重要な場所であって古い段階から築かれ始めたのではないか。未完成の場合はそこまで重要視されていなかったのではないかと、思われてきました。

以前、新たな未完成説を提示させていただいてから、「亀田さんの言ってる未完成ってどういう未完成ですか」という質問が時々あります。僕は未完成にもいくつかの段階があると思っています。例えばある施設を造ろうとする時、一期工事、二期工事みたいな区別がありますよね。その時にひとまず一期工事が終わったからここで止まって、休憩して二期工事にしようかと。例えばこの段階で工事が止まってしまった場合、

これを未完成と見るのか、それとも少なくとも一期工事は完成しているんだと見るのかという、見方です。それから、ここに書きました「意図的な未完成」。例えばあるビルを造っていたら資金が続かなくなつて、ビル工事が途中で止まつてしまつている、そういうビルもありますよね。神籠石とか朝鮮式山城の中にもそういうのはないのかと考えています。政治情勢との絡みもやはりあるのかなと思つています。

それから、「見せる城」。これは向井さんが以前書かれた考えですが、僕もそのような考えはあると思つています。「見せる」ということは、こういう城があるんだよと見せることによって敵が来るのを防ぐという意味合いがあると考えられます。古代にもそのような意識はあったと思います。こちら側の見える所だけ造つておきやいい、こつちは重要だから先に造つたけど途中で止まつてしまった、とか、いろいろな状況が推測されます。

ですから、「未完成」という言葉に関して、途中での停止は単なる偶然ではなくて、当時の政治、社会情勢を反映したものでろうと僕は思つています。「見せる」というのはそのとおりなんです、それプラス、深い意味もあると考えておいたらどうでしょうかということです。

それから、これに関わる話で「繕治」ということがあります。大野城・基肆城・鞠智城が六九八年に「繕治」されます。この前後に高安城も修繕などがされています。この「繕治」が修繕なのか、何か新たに造るのか、意見があります。六九八年という、奈良時代直前の時期なんですが、「繕治」しています。繕治記事が出てくるのはこの三つですから、当時の国家としてはこれらを意識し、重要性、その城の性格なども加味

して繕治しているんだと思います。

「繕治」っていう行為は、そういう意味で城の重要性を示していると僕は思っています。その「繕治」が「修繕」でしたら、岡山の鬼ノ城も城壁の修繕をしています。この「修繕」っていう発想もすごく重要だと思っています。大野城もちゃんと城壁を修繕しています。つまり維持管理していることになるわけですね。実は「修繕」が確認された例はほとんどありません。「繕治」という見方で考えてみる必要もあるのかなと思っています。

鬼ノ城に関しましては、僕は今、岡山にありますから特にそうなんです。朝鮮半島から北部九州、近畿地方を攻めて行く時に途中にあり、とても重要な城だと思っています。あの地域の海は、備讃瀬戸という言い方をされます。備讃の「備」は吉備の「備」で、「讃」は讃岐です。岡山県と香川県の間、ちょうどあそこを押さえると通りにくくなるという重要なエリアです。記録には出てきませんが、鬼ノ城が造られた一つの要因だと思っております。鬼ノ城と屋嶋城でこの海を監視するわけです。

そこでこれから「完成と未完成」、「未完成の諸段階」、「遺構の有無、多い・少ない」、「遺物の多い・少ない」、これらをキーワードとしてお話ししていきたいと思っています。

まず、未完成のお城ということで土塁の有無でみていきます。豊前の唐原山城、筑前の阿志岐山城などは土塁がない部分があります（写真1）。このスライドは唐原の、先ほど言いました列石です。この上部にはちゃんと加工の痕跡があります。そういう意味で、ちゃんと据えて、上に土塁を作ろうとしているんです

が、ご覧のように後ろに何もありません。どうも土塁がなかったのではないかと考えられています。もし土塁がもともとあって削られたんでしたら、こういう削られ方はしないのではないかとわけております。先ほどの場所はちょうどこの辺(図2、丸で囲ったところ)ですが、この点々々の所は土塁も列石もありません。実線のところは、基本的に斜面の加工と列石、一部土塁らしきものがある所もあるんですが、明確な土塁がありません。つまり、唐原の山城に関しましては土塁がない、そういうことになります。これはもう一カ所



写真1 豊前唐原山城跡(末永2003)

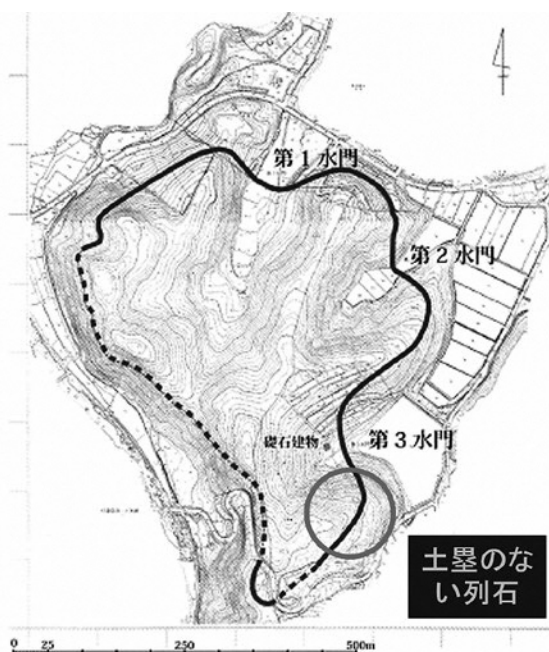


図2 豊前唐原山城跡
(古代山城サミット実行委員会2010)



写真4 大分県中津城石垣に転用された石材



写真2 唐原山城跡（南東部）



写真5 大分県中津城石垣に転用された石材



写真3 唐原山城跡（南東部）

の所ですが、こんな感じですよ（写真2）。斜面を加工して石を置いて、後ろにちよつと裏込めの土を入れたかと思いますが、そこで止まってしまっているみたいです。これが、その裏の状況ですよ（写真3）。もし後世に削られたのであるならば、もう少し違った削られ方があっていいんじゃないかと思っています。

さらに、行橋市の小川さんが明らかにされたんですが、この遺跡の近くの山国川という川の対岸に中津城というお城があります。有名な黒田官兵衛が造ったお城なんですけど、そこに、この唐原山城跡の列石の石が持つて行かれています（写真4、5）。

黒田官兵衛が中津城を造る時に持つて行ったんだといわれています。つまり、ちょうど豊臣秀吉の頃になるのかと思いますが、唐原山城跡の列石が見えていたのか、あることが知られていた、そして、持つ

て行かれた。その時に、もし石が欲しくて、そして石の上に土塁があったのなら、その土塁をわざわざすべて削らなくても石の所だけ持って行けばいいわけです。土塁が全部ないというのはやはりおかしいので、もともと土塁がなかったんだらうといわれています。

それから阿志岐山城跡、ここも、この北側部分に土塁があつて、南側はありません(図3)。ですから、三分の一ほどしかないということになります。上側が大宰府側になりますので、ここは大事な場所だねっていつて、見える場所だけに土塁を築いたのかもしれない。これが土塁で、きれいに版築して石が置いてあります(写真6、7)。ちよつとここは特徴的で石を二段に積んだりもしています。出てくる土器はこういう土器です(図4)。

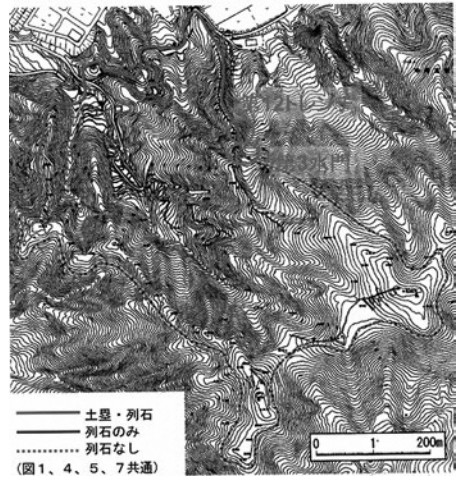


図3 筑前阿志岐城跡(向井2010b)



写真6 阿志岐城跡第12トレンチ列石と土塁(草場2008)



写真7 阿志岐城跡第12トレンチ列石と土塁(草場2008)

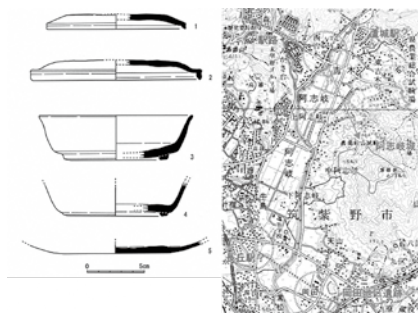


図4 阿志岐城跡第3水門の土器
(左：草場2008、右：向井2010b)

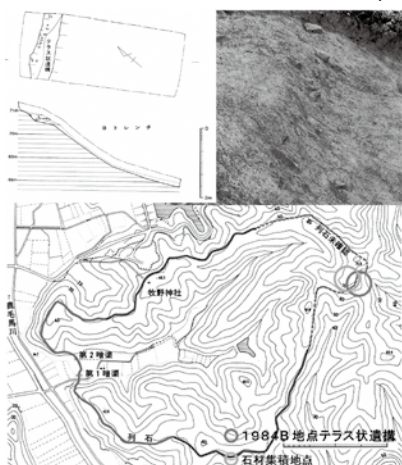


図5 筑前鹿毛馬神籠石列石未確認地点
(井上1984、向井2010b)

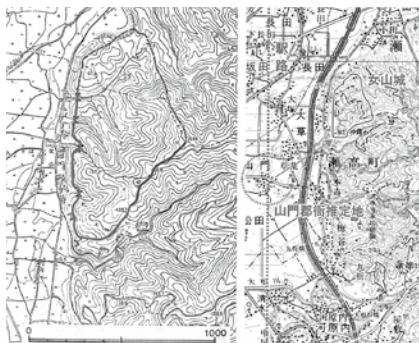


図6 筑後女山神籠石 (向井2010b)

だいたい八世紀の前半ぐらいかなといわれております。それ以外に分かっていません。

それからもう一カ所、これは筑前の鹿毛馬神籠石です(図5)。福岡県飯塚市にあります。ここはほぼ全域きれいに残っているんですが、後ろのほうに行くと、発掘調査をした時点で右上の写真のように段がついていて石がないところがあります。おそらく石を置くために段加工はしたんだけど、石が置かれなかったようです。近くに石が転がっています。ここも、造る途中の最後の最後だったのかもしれませんが、石を並べる段階で工事が止まったのではないかと思われます。こういう例が各地にあるようです。

それから、みやま市の女神籠石です(図6)。福岡県の南のほうの有明海に面するところですが、この場合は南側に列石があつて、北側にはないといわれております。これは向井さんが書かれた図なんですが、

城の西側に駅路があつて、こちら側を意識したと考えられています。これはある面で鞠智城と通じる面があつて、有明海を意識すると南から攻めてくるんじゃないかと思ひます。そうすると、北側はひとまずなくても、南側さえまず造つとけばいいんじゃないのという話です。こういうようなやり方で土塁が全周しない、そういうものが各地にあるようです。これらを僕はひとまず未完成のグループに入れておきます。つまり、「ここだけでもう完成なんだ」という言い方もあるかもしれませんが、僕は、ひとまずこれらは未完成のグループに入れています。

それからもう一つ、瀬戸内海沿岸地域の山城には、門を建てる時の門の基礎部分に石を添える、唐居敷と

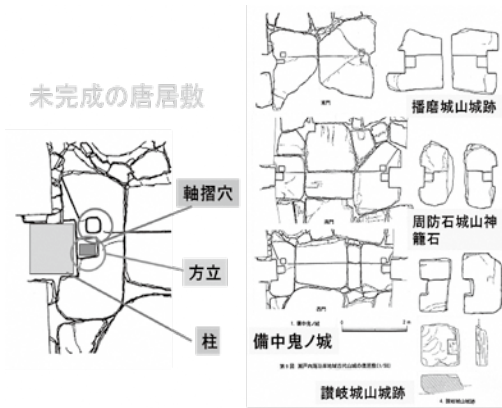


図7 未完成の唐居敷 (村上1998)

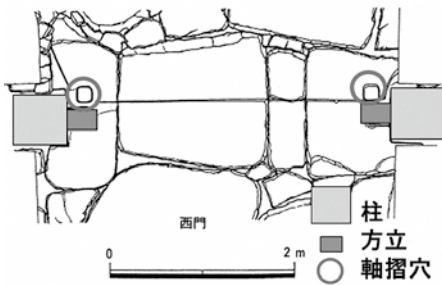


図8 備中鬼ノ城西門 (村上1998)



写真8 備中鬼ノ城西門



写真9 備中鬼ノ城西門（村上1998）



図9 備中鬼ノ城西門唐居敷（村上1998）



写真10 備中鬼ノ城西門唐居敷（村上1998）

いうものがございます（図7）。ちょっと見にくいかと思いますが、この石の凹んだところに四角い柱を添える。その横に方立という扉と柱の隙間を埋める材を立てる穴、それから、ここが軸摺穴です（図8、写真8）。扉の軸、「ギギー」って回した時の軸を据える穴などがあります。このような唐居敷があります。これは鬼ノ城（図9）のものなのですが、鬼ノ城以外に播磨の城山、周防の石城山などにあります。それから、讃岐のほうにもございます。

この写真10は唐居敷を使用した門の下の部分の復元の様子です。この辺の石敷は当時のままのものです。

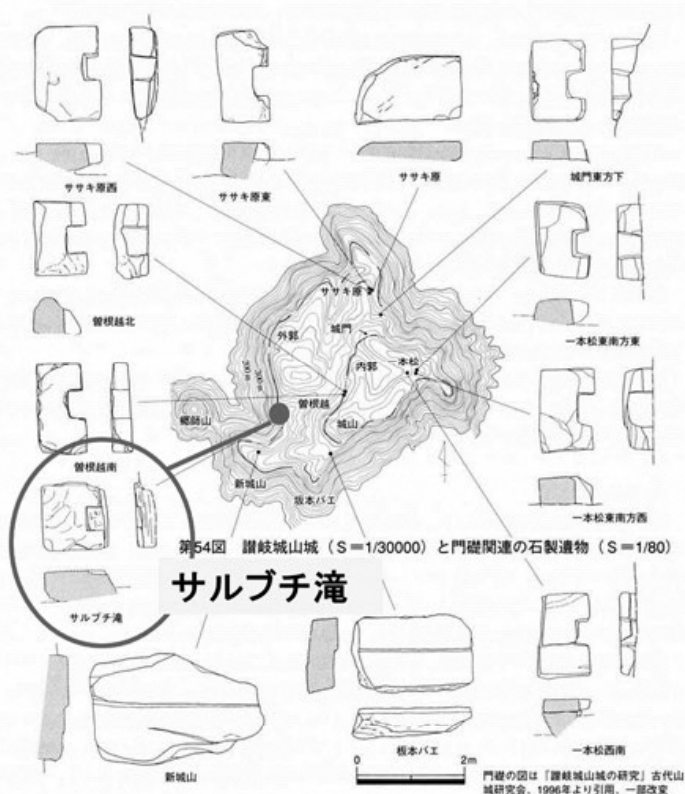


図10 讃岐城山城跡の唐居敷 (松尾・谷山2006)

この四角、大きいほうが柱になります。この小さい方形のもの、これが方立、そしてこちらが扉になります。この穴に扉の軸があつて、「ギギギツ」と回すわけです。

先ほど挙げた唐居敷の資料の中で、讃岐の城山ではたくさん見つかっています。これは総社市の松尾さんが作られた資料です(図10)。

もともと向井さんたちがされた仕事が一ベースになっています。この中に、明らかに四角い柱を添える穴が通つてないものが見つかります。先ほどの鬼ノ城のものは四角の穴がきちんと挟られています。この城山のものには方立用の穴や軸摺穴はございません。それから、特にこれ。柱用の四角の穴が途中まで彫られています。貫通していません。つまり、これはもう未完成だと考えざるを得ないということです。つまり、讃岐の城山に関しまして

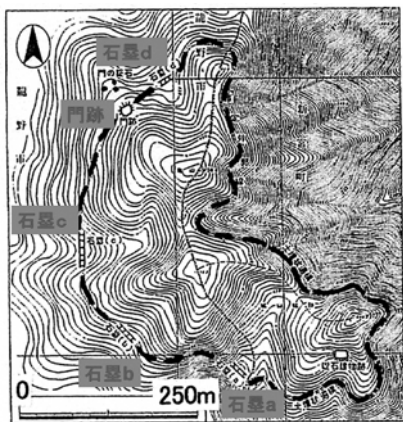


図11 播磨城山城跡（加藤1995）

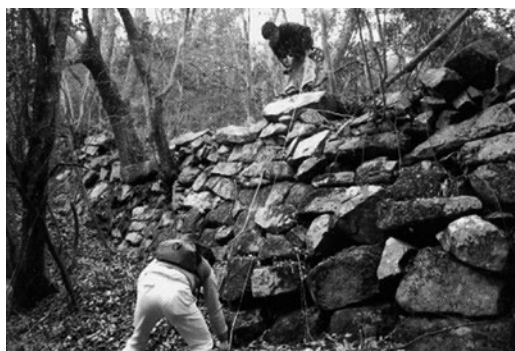


写真11 播磨城山城跡石塁C（加藤ほか1988）



写真12 播磨城山城跡唐居敷

は、門を造る準備をして、その門に据える石を準備して加工を始めたんだけど、少なくとも唐居敷を据えて建物を建てるまでには行っていないということが、こういうことからお分かりいただけるかと思います。

これは播磨の城山の図です（図11）。点線が加藤さんという地元の方が想定された城壁のラインです。この山城、城壁が残っておりません。部分的に、石塁と書いてあります。それから門の跡と書いてある所がございます。この写真が先ほどの石塁の所です（写真11）。僕も現地にお邪魔させていただき、この石垣を見学させていただきましたが、よく見ると、石垣に土塁がつながっていないんです。石垣だけなんです。

門の所に行きましたら、このように唐居敷がおかれてありました（写真12）。

方立の穴はあるんですが、軸摺穴がありません。実は扉の軸を唐居敷に入れなくても、柱の中に支えるものを造って扉をまわすことも可能なんですが、ひとまずあるだろうと想定すると、これも未完成なのかなという話になります。少なくとも先ほどの讃岐の城山のものとはそう考えざるを得ないということです。つまり、このように見ていくと、結構未完成のものがありますねという話になります。このようなことを頭に入れていただきながら、次に行きます。

三・遺構と遺物の個々の検討と総合化

（一）遺構

つい最近行った仕事の一つがこの版築に関することです（写真13）。これは百済の風納土城といまして、西暦四七五年ぐらいまで、百済の王様がいた城の築城の様子です。これは版築で城壁を造っているところです。ここに、見にくいかと思うんですが、堰板をは

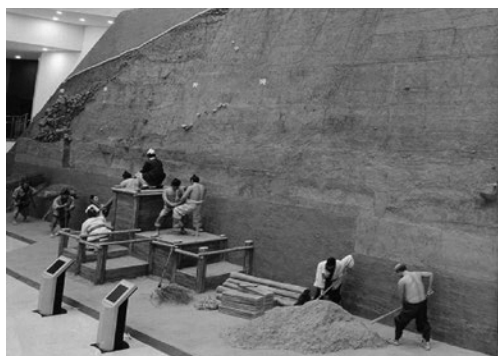


写真13 百済風納土城の城壁復元模型
（漢城百済博物館2012『漢城百済博物館』）

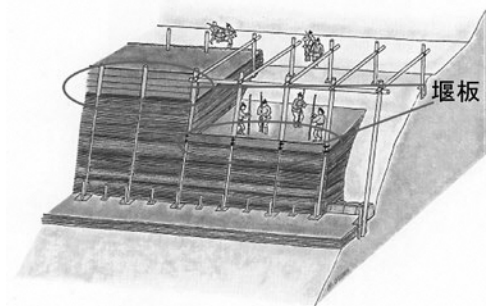


図12 豊前御所ヶ谷神籠石版築土塁復元模式図
（小川2006）

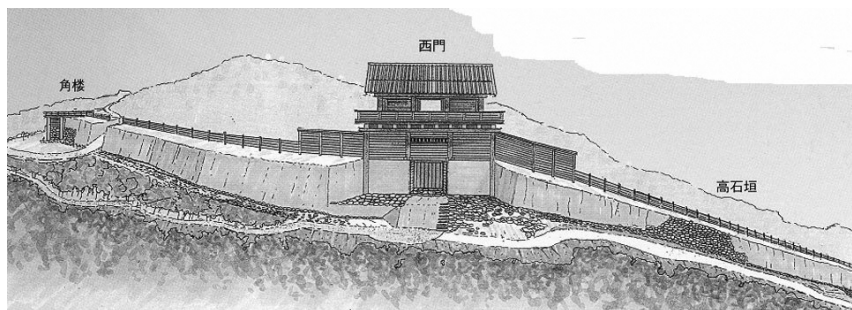


図13 備中鬼ノ城西門復元図（平門）（総社市2007）

めて、枠で囲んで、人が突いています。

これは豊前御所ヶ谷神籠石の山の斜面をカットして片側だけに土を入れるやり方をしている復元図です（図12）。版築していく時にここに柱を立てて、板をはめて中に土を入れて突いていく。本来ならこの側面にも板をはめ、版築していると思うんですが、この絵では板が描かれていません。最近、僕はどうもここにはもともと板がなかったのかと思っていました。

これは鬼ノ城の城壁です（図13）。先ほどの門がこの場所ですが、その横にこのような石垣があつて、こちらのほうに土塁が残っております。

これが復元された版築土塁（写真14）なんです。が、もともとはこの右のような様子です。これが、版築の様子を再現しているところです（図14）。こういう枠で、こちら側に堰板があつて、

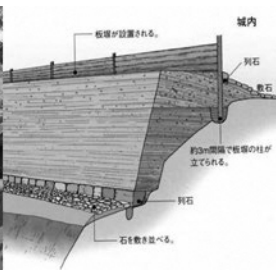


図14 備中鬼ノ城土塁復元図（総社市2005）



写真14 備中鬼ノ城西門南東部土塁・石敷（左：総社市2005）

上から突いています。そうするとこんなふうになりますよという模式図です。

この図、すごく細かい図ですみません（図なし）。お手元の皆さんのレジュメにも入れてあります。

まず、石垣の右端のところに石が立っていまして、そこから土塁があるのですが、その右側に斜め上からの線が見えます。つまりこの右側の土塁は左側の石垣などのあとに作られたことがわかります。そしてこの右下のところが水門で、その右側の様子が一番下の図です（図15）。この図で大事なところが、赤い矢印をつけたところです。ちよつと見にくいと思いますが、赤い矢印のところが堰板の場所と思われる。そしてその横の土層をみると、その堰板のところで少し上に上がります。このような土層になるのはそこに板

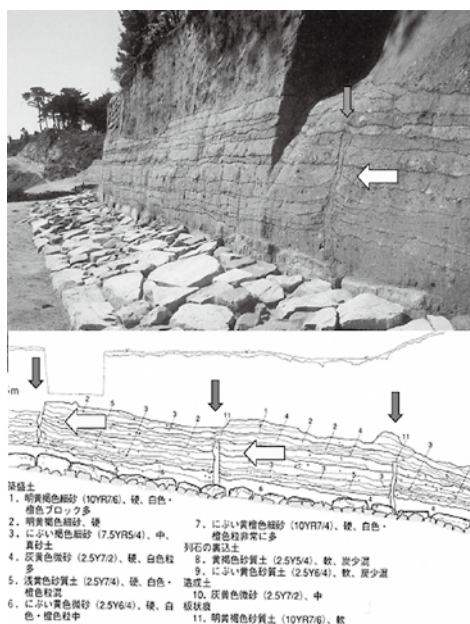


図15 備中鬼ノ城第5塁状区間版築土塁・堰板痕跡、土層端部の上がり（村上・松尾2005『古代山城鬼ノ城』）

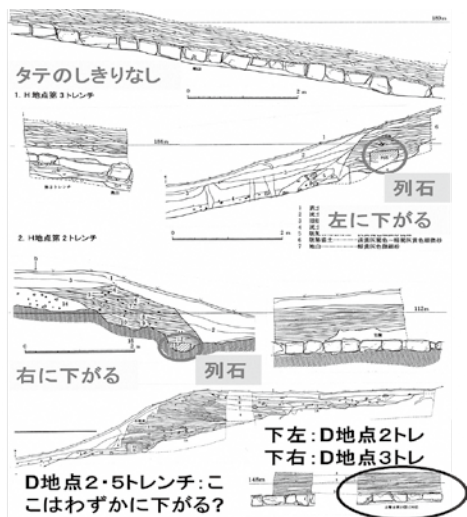


図16 備前大廻小廻山城の版築土塁・図面
(出宮・乗岡1989)

などがあるからだと思います。つまりこの鬼ノ城の土塁には正面だけでなく、側面にも堰板があったことがわかんと思います。

これは同じ岡山県ですが、備前大廻小廻山城の土塁の図です（図16）。まず、正面からの図には鬼ノ城のような縦方向の線はありません。さらに次の図では列石の上から前に土塁が被っていることがわかります。左下の図も同じです。大廻小廻山城では土塁の前面の柱穴が見つかっておりません。この部分の土塁には堰板が使われなかった可能性があります。

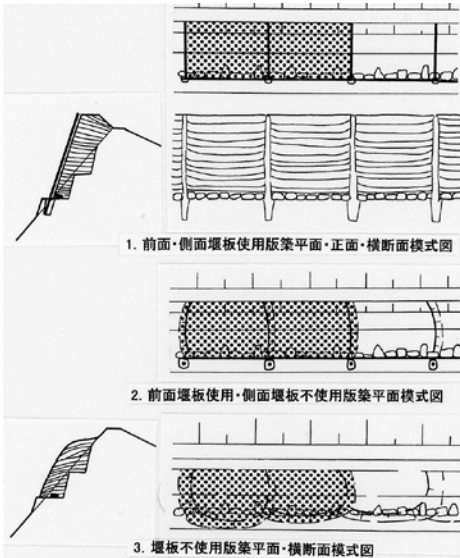


図17 版築模式図

一方、堰板がなくて水平の土層ができるのかという疑問もあります。実は奈良の薬師寺の東塔を掘っているときに見学に行ったことがあります。そのとき、土層を見学させていただと、基壇の両端側が少しずつ下がっていることに気がつきました。そこで担当の青木さんに「堰板なし？」と伺うと、その可能性を述べられていました。そして報告書にはそのように書かれていました。あれだけ立派な版築なんです、堰板がなくてもできるようです。

これらを模式的に示したものがこの図です（図17）。備中鬼ノ城（1）では正面と側面に堰板を使用し、豊

前御所ヶ谷神籠石（２）などでは正面には使用しますが、側面には堰板を使用せず、最後の大廻小廻山城（３）では正面にも側面にも堰板を使用しない土塁があると考えられますと言うことです。

これは韓国の木川土城(図18)のもですが、ここにも堰板の痕跡が見られます。この稷山蛇山城でも側面の堰板の痕跡が推測されます。正面観ですと、土層がずれている部分があります。この蛇山城では前面に鬼ノ城と同じような敷石があります(図19)。

そして、これは一二五〇年に築かれた高麗時代の江華島の外回りに築かれた江華中城の土塁です（写真）

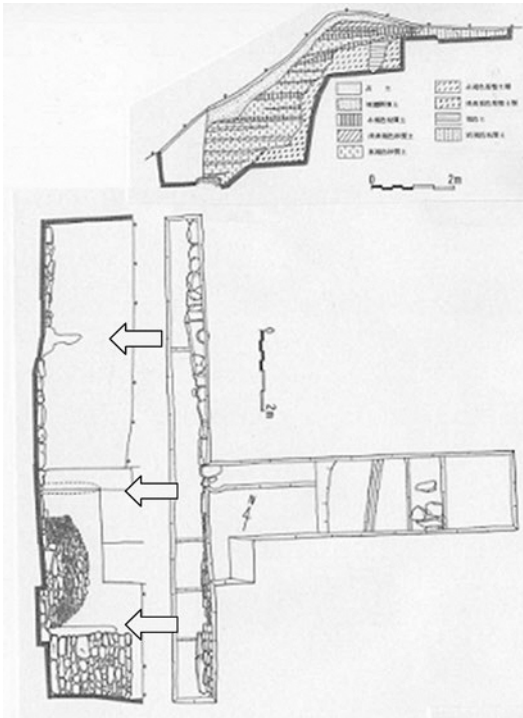


圖18 韓國忠清南道木川土城西側土壘
(尹武炳1984『木川土城』忠南大學校博物館)

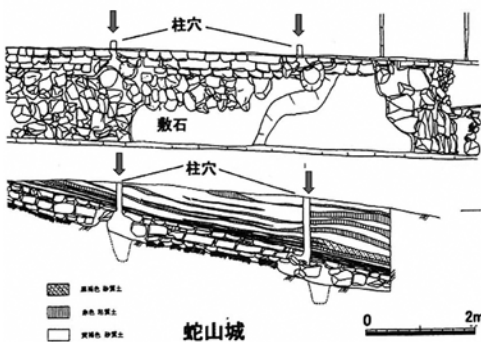


圖19 韓國蛇山城
(成周鐸・車勇杰1994『稷山蛇山城跡』)

15)。写真のように側面の堰板が埋もれたままになっている状況がよくわかります。次がその模式図です(図20)。そして正面側に堰板の痕跡がきれいに残っている痕跡です(写真16)。これだけきれいに残ると言うことは堰板がそのまま被さっていたことを示していると思います。つまり堰板を取り外さなかったと言うことでしょう。

実は日本の筑前鹿毛馬神籠石でも前面に一部板が残っていたという話があります。ということは、日本でも堰板を取り外しながらあげていくやり方と、そのまましておく両方のやり方があったのかもしれない

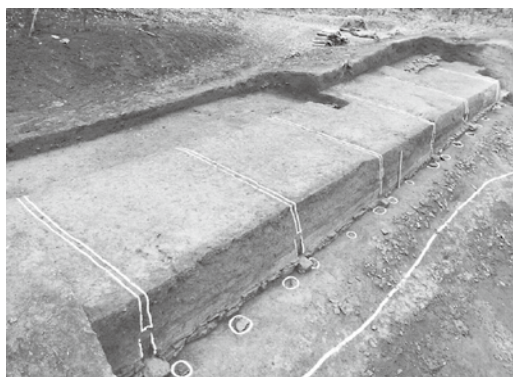


写真15 江華中城土壘 (1250年築城)
(中原文化財研究院2012『江華玉林里遺跡』)

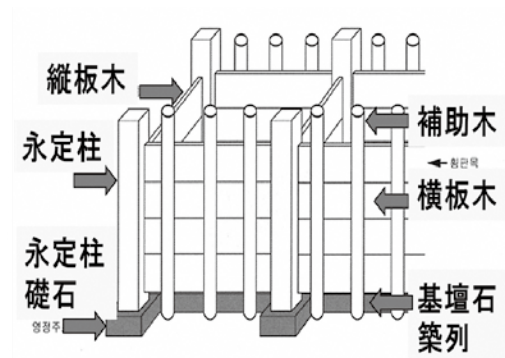


図20 江華中城土壘 (1250年築城)
(中原文化財研究院2012)



写真16 江華中城 (1250年築城)
3地点2トレンチ外側土壘堰板痕跡
(中原文化財研究院2012)

ん。このような視点でまたみると違ったものが見えるかもしれません。

これは百済漢城期の四、五世紀の王城、風納土城の城壁の断面（写真17）で、版築の痕跡がきれいに残っております。これは同じく百済漢城期の王城の一つ、夢村土城の東側土塁の写真（写真18）で、発掘調査途中にお邪魔して撮らせてもらったものですが、版築ではありません。つまり同じ百済漢城期の王城ではあるんですが、土塁の築き方が異なっています。

そして、百済最後の泗泚時代の王城、扶蘇山城の版築土塁です（写真19）。これは統一新羅時代のもので

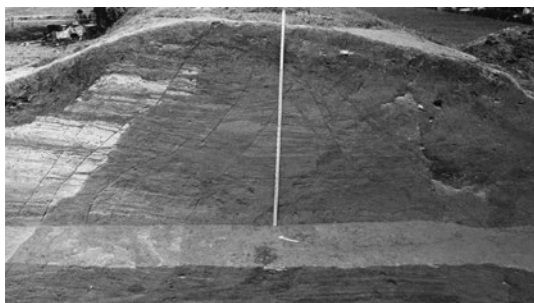


写真17 風納土城東側土塁断面:版築



写真18 夢村土城東側断面



写真19 扶蘇山城南門東側土塁

あるという話もありますが、きれいな版築土塁です。

これは泗沘羅城の東側の土塁です（写真20）。六世紀代のものと思われます。外側の下部に加工した石を積み上げた石垣があります。土塁の断面です（図なし）。裏込めの様子がわかります。こちらが裏側です。石を葺いて、被せています。これは土塁外側の基礎部分の写真（写真なし）で、敷粗朶（しきそだ）工法といつて、葉っぱとか、枝とかをそのまま埋めて土塁を作る工法が採用されています。これが大宰府の水城でも見つかっています。このあたりから日本に入っているんだねって、また注目されました。

次の写真（写真なし）をよく見ていただくと、土層の中に黒いものが見えますでしょうか。これは粗朶がスパッと切られた状況です。つまり、この部分にも同じように粗朶をいれていることがわかります。ここもそうです。この上の面に、葉っぱとかが散らばっています。何枚も粗朶を入れては土を入れて、粗朶と土とを繰り返して積んだようです。この土塁が築かれたところは水が多いところで、水気の多いところではこのような敷粗朶工法が使用されたようです。大宰府の水城でこの工法が採用されているのは、まさに水が多いところだからだと思います。



写真20 扶余泗沘東羅城（北東より）

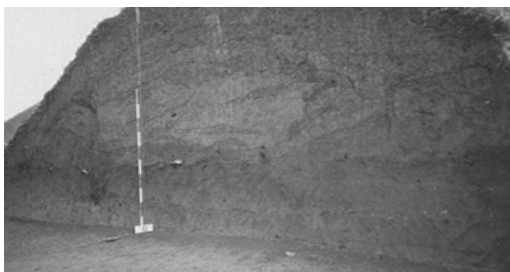


写真21 梁山萆池里土城（新羅）6世紀前半・城周約1000m
（沈奉謹・金東鎬1983『梁山萆池里土城』東亜大学校博物館）



写真22 梁山萆池里土城 北側土壘柵列（新羅）
（沈奉謹・金東鎬1983）



図21 西門南東部第3壘状区間石垣（1/200）
（村上・松尾2005）

今、なんのお話しをしているかといいますと、朝鮮半島の土塁の築き方も結構多様だということです。これは新羅の梁山萆池里土城というお城の土塁です（写真21）。六世紀前半頃のものといわれています。ちよつと写真が見にくくて申し訳ないですが、版築にはなっていないようです。日本の古墳築造時の土の入れ方に似ているように見えます。ただし、これはこういう柱はちゃんとあります（写真22）。

このような多様性をどう捉えるかということは今後の課題です。先ほど見ていただいた高麗時代の土塁もそうですが、そういう視点でもう一度日本の山城も見ていく必要があるのかなと思っています。

それから先ほどもお話した修繕の話です。ここに石が立っているのをご覧いただけますか(図21中・下)。ここから先の石垣は修繕した部分だと思っています。この上図はこの部分を上から見たところです。

この赤い弧状のラインは石垣を作るときに穴といいますが、掘方です。この弧状のラインは、僕は当初のものではないと思っています。当初のものでしたら、普通は直線的になると思います。これは弧を描いています。これは土塁が壊れて落ちた時の跡、つまり土砂崩れで落ちて、そこを埋める時にその穴をそのまま使って石を積み上げたのではないかということです。そう考えると、この高石垣は修繕したものになります。それは、おそらく古代、鬼ノ城が使われている時代にされたんだろうと。つまり、鬼ノ城に関してはかなり大規模にこうやって修繕したのではないかと思っています。鬼ノ城はほかの神籠石系山城とはちよつと違っていると思っています。

(二) 遺物

次に遺物のお話をします。ゆつくりしゃべると時間がなくなってきましたので、ちよつと急ぎます。朝鮮式山城では比較的遺物が出土しますが、神籠石系山城ではほとんど出土しません。朝鮮式山城では、土器以外に瓦も出ます。神籠石系山城では基本的に瓦は出ませんが、鬼ノ城ではごく少数出土しています。ただ、これはもともと鬼ノ城に使ったものかは分かりません。

これらは讃岐の屋嶋城跡、伊予の永納山城跡の遺物です。図22―1～6は屋嶋城跡のものです。当初この

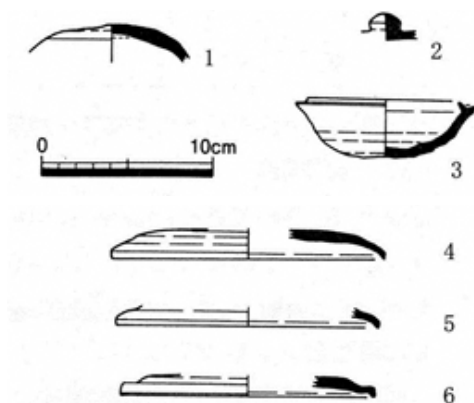


図22 讃岐屋嶋城跡
(高松市教育委員会2010『古代山城日韓シンポジウム』)

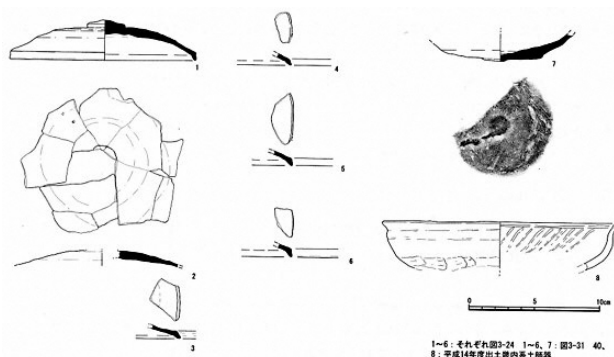


図23 伊予永納山城跡 (渡邊2012)

3の杯身は古過ぎるように思われていましたが、近年では築城時でもいいのかなと思われています。それからこれは愛媛県の永納山城跡のものです(図23)。7の杯身に関しましては、担当者の方は「うーん」とおっしゃっていますが、僕はおそらく築城時のものではないと思っています。永納山の大多数の土器は八世紀に入るくらいのものだと思いますが、こういう古いものもあると思っています。屋嶋城に関しては六六七

年の築城記事がありますので、

図22-3のようなものが出て
も、そして八世紀のものが出て
きても、別に問題ないと考えま
すが、永納山城跡に関しては少
し問題視されます。しかし、屋
嶋城を参考にして土器をみまし
たら、永納山城跡のものも問題
ないのではないかと思います。

鬼ノ城に関しましては、この
ように城壁が全周回っています



図24 備中鬼ノ城復元模式図（山陽新聞）



写真23 備中鬼ノ城北門（懸門）

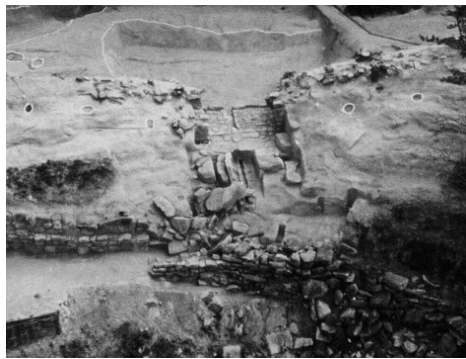


写真24 備中鬼ノ城北門（懸門）
（村上・松尾2005）

（図24）。このように復元もされています。これは北側の門（写真23）なのですが、懸門といって、梯子をかけて上にかかる構造になっています。城内で建物群が見つかっています。この建物はちよつと長くて管理棟ではないかと言われています（写真25）。そしてこの西端の長い建物の近くに平安時代のお堂があったと考えられています。

この写真は倉庫です（写真26）。傾斜地に造っていますのでやはり前面が流れやすくなっています。これはしようがないですね。

さらに、鬼ノ城に關しましては貯水施設が見つかっています。これが土手（写真27）で、この内側が池に

なっています。この池の意味は、飲料用の池でもあるでしょうし、雨水が直接城壁にぶつくと、城壁が壊れてしまいますので、途中に池を造ることによって城壁を壊れないようにするためのものだとも考えられています。このような貯水施設と考えられるものは豊前の御所ヶ谷の神籠石にも似たものがあります。つまりこのような施設がある山城はやはりきちんと城ができあがっていたんだらうなと思っています。

さらに、これは東門の近くの鍛冶炉の一群です(図25)。鉄器などを作る鍛冶炉が出てきております。ここに柱穴があつて、どうも小さな小屋ぐらひはあつたようです。このような鍛冶炉が見つかっていますのは、鬼ノ城以外は対馬の金田城と先ほどの永納山だけです。何を造っているのか。武器を造っているんじゃない



写真25 鬼ノ城礎石建物(2×6間:管理棟?)



写真26 鬼ノ城礎石建物(3×3間:倉庫)



写真27 備中鬼ノ城貯水施設土手1
(金田・岡本2013)

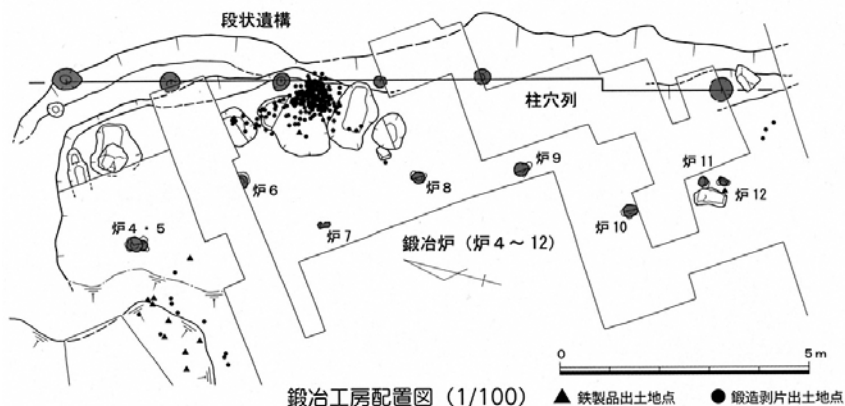
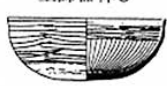
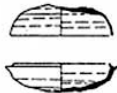
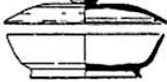


図25 備中鬼ノ城鍛冶遺構 (金田・岡本2013)

かによく言われていますが、出てくるのは、たがねとか、釘とか、鉄鏝です。つまり、築城時の石を加工したりする時のものを作ったり、修繕していたんじゃないかと考えられています。

もう十何年も前のことですが、姫路の沖の家島という所で発掘調査をやったことがあります。「石切屋さんが石を採るから発掘調査してくれ」ということで発掘したんですが、石屋さんたちと宴会をしたことがあります。その席で、石屋さんのちよつとお年の方と飲んでいましたら、「俺たちは朝現場に行ったらまず鍛冶をやるんだ」とおっしゃっていました。「まず、たがねを打って使えるようにし、それで石を切るんだ」と。つまり、石屋さんたちは自分らが使うたがねを自分で鍛冶をするんです。鬼ノ城の鍛冶場もまさにそういう話でもいいのかなということですね。

次に土器です。いろいろあります。たくさん出ました。ほかの山城に比べて、神籠石系山城の中では最も多いほうです。これは林部さんといまして、国立歴史民俗博物館の教授が昔出した本の図面、飛鳥の宮殿から出土した土器の編年表です(編年表1)。

640年頃	飛鳥 I	   小墾田宮推定地
		   川原寺下層SD020
660年頃	飛鳥 II	   山田寺下層
		   坂田寺下層SG100
710年頃	飛鳥 III	   大宮大寺下層
	飛鳥 IV	   藤原宮下層SD1901A
710年頃	飛鳥 V	   藤原宮

飛鳥時代を大まかに5時期に区分した。飛鳥Ⅰは600~640年、飛鳥Ⅱは640~660年、飛鳥Ⅲは660~680年、飛鳥Ⅳは690年前後、飛鳥Ⅴは710年前後。飛鳥Ⅰ・Ⅱ・Ⅲをさらに細分したのは、伝承飛鳥板蓋宮跡で検出される宮殿遺跡の年代を明確にするためである。

編年表1 飛鳥時代十器の編年 (林部2001)

この六六〇年頃に空白があります。その理由は、飛鳥を一時離れた時期、大津宮の時期です。つまり、大津宮に都が移ったときに飛鳥の王宮では、ちょうどその時期の土器が出ない、というのが林部さんの考え方です。この考え方は、僕は素直にいいんだろうと思っています。先ほど見ました径の小さい土器はまさにこのあたりのものです。

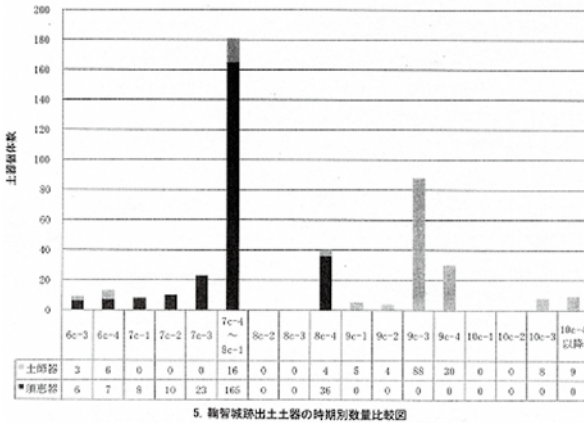


図26 鞠智城跡出土土器の時期別数量比較図（木村2012）

鬼ノ城の土器には径がやや大きいものが多く、こういう径の小さいものが少しあります。この径が大きなものは大体七世紀の終わり頃から八世紀の初め頃に入ります。この径の小さな点をどのように見るのか、この辺りはまた意見が分かれるところです。

この図は、矢野さんたちが作られた立派な報告書の中の大きな成果の一つだと思っているものです（図26）。木村龍生さんが作られたもので、この一番たくさん出土している時期が繕治の時に重なるんじゃないかといわれています。築城段階の七世紀の第三四半期が二三、繕治段階の七世紀第四四半期から八世紀の初めのところが一六五点です。この数字を二〇分の一にすると、七世紀の第三四半期の築城時には二・三点しかないことになります。多いほうは十十点になります。つまり、土器の出土比率

からいったら、やはり築城時は数が少なく、繕治段階にたくさん使用されていたと考えられます。

この図は鞠智城の六四号建物のものです(図27)。一番はちよつと別のものなんです、これが築城時の古いものではないかと思っています。そしてこの残りのものが六四号建物の遺物です。ここでは瓦も出ております。鞠智城跡の瓦としてよく取り上げられるものですが、この瓦をいつにするのか、すごく難しい問題です。六六七年頃の築城時のものか、六九八年の繕治段階のものか、すみませんが、今日は置いておきます。

そして、遺構と遺物の総合化の話です。あとの赤司さんのお話にも出るとありますが、この図は赤司さん

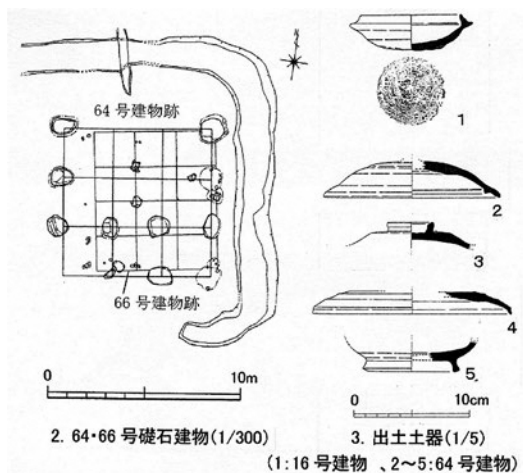


図27 肥後鞠智城跡礎石建物と出土遺物(西住ほか2012)

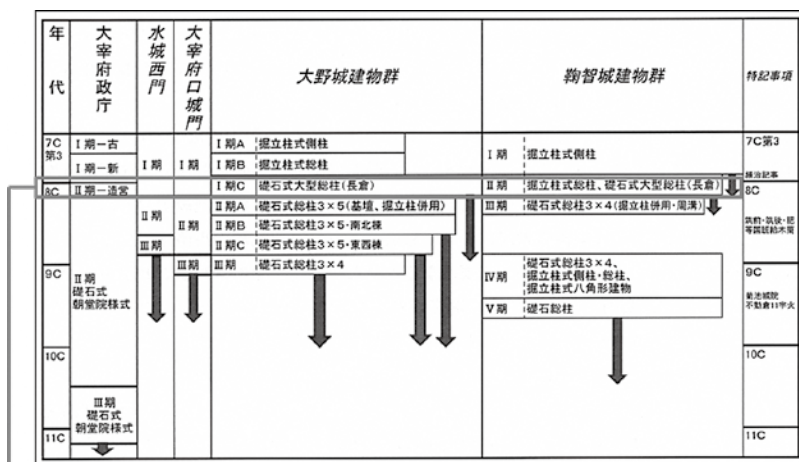
が二〇一六年に出されたものです(図28)。僕は基本的にこれに同意していますので、そのまま使わせてもらっています。これは大野城と鞠智城の建物の流れを合わせたものです。

今回の発表に関連してこの図26の年代について、木村さんに電話して確認しました。何を確認したかといいますと、「木村さんの土器の年代観は作られた年代を言っているんですね」と。つまり、「使用年代はもう少し幅を持たせて結構です」ということを確認しました。

鞠智城では六九八年の繕治の時に瓦を使ったのか、使わなかったのかということはやはり大きなポイントかなと思って

います。佐賀県の基肄城の話ですが、礎石建物第9地点の調査で瓦が出土しています。ちょうど僕が大学院生の時で、そのお手伝いに行き、拓本や図面を採りました。このあたりのものは僕が一部関わったものです。その左の四分の一の破片の軒丸瓦は少なくともこの建物から出ています。これ以外にも礎石建物周辺でいわゆる百済系単弁軒丸瓦が出ておりますので、少なくとも基肄城に関しては礎石建物に瓦が使用されたことは動かないだろうと思います。基肄城では奈良時代の瓦も出土しており、土器も新しいものが出土しています。ただ、一方で基肄城に関しましては、礎石建物以外の掘立柱建物がよく分かっています。調査がまだ十分進んでないので今後どうなるか次第ですが、ひとまずは基肄城では瓦は礎石建物に伴っていたと考えています。

次に遺構・遺物・記録が語るものということで、これらのまとめの話をします。城内に遺構があつて、遺物がたくさんある山城は大野城、基肄城、金田城、鞠智城で、これに僕は



→ 緒治期(698年)における礎石建物造営・瓦使用?

図28 大野城・鞠智城建物群の変遷案(赤司善彦2016)

鬼ノ城も含めたいと思っています。そういう意味では、鬼ノ城は完成したお城の中に入れていいんじゃないかと思います。遺構がなくて遺物もほとんど出ない山城が神籠石系のもので未完成であつたんじゃないか。これは神籠石系のものに多いんじゃないかと考えています。これらを併せますと、北部九州の記録のある朝鮮式山城と、記録はありませんが、プラス鬼ノ城、これらは大多数の神籠石系の山城は違うのではないかというお話です。

四・古代山城の成立と変容

(一) 古代山城の成立

六六〇年の百濟滅亡、六六三年の白村江の戦いの前に築かれた古代山城

さて、ここからが本来の総論のお話です。まず、古代山城はいつできたのかということで、六六三年の白村江の戦い以前にあつたのかという話です。これも以前からいわれていることですが、『日本書紀』の斉明天皇二年の六五六年の是歳条の「宮の東の山に石を累ねて垣となす」という記録があります。石垣を造つたんだ。これは酒船石遺跡ではないか、という明日香村の報告書が出ています。

それから、渡辺正気先生が六五八年是歳条の『日本書紀』の中の記録を取り上げて、これが神籠石なのではないかとおっしゃっています。これにつきましても意見が分かれています。

遺構として、酒船石遺跡をどう捉えるかですが、少なくとも場所としては板蓋宮、後飛鳥岡本宮の東の山

の上にありますので、そういう意味ではおかしくありません。左側の写真が発掘した時のものです。これは地震で倒れたんだらうといわれています。それを修繕して、積み直したものがこちらです。

下に花崗岩の石材を並べ、その上に、砂岩、奈良県天理市の砂岩で作った方形の石を積んでいます。この砂岩が先ほどの斉明天皇が関わる「狂心（たぶれごころ）の渠」に関わるのではないかと考えられています。狂心の渠のお話というのは、斉明天皇が、大規模土木工事ばかりしてだめだという話の中に出てくる話ですが、その中の一つに、まさに天理の石上山から石を運んできた話があります。この石がそれではないかというお話です。

僕はこの酒船石遺跡関連の話は、一応可能性はあると思っています。これを山城と呼ぶかどうかはちょっと別にして、山城状のものであるのは間違いないと僕は思っています。ですから、それらしきものが六六三年より前にあった可能性、少なくとも明日香村の出土土器の編年をそのまま信用するならば、先ほどの記録に関連する可能性は無視できないと思っています。

次に六六三年以降についてです。ここからが本番です。六六四年の水城、それから長門は場所が分かっています。六六五年の大野城、基肄城、六六七年の公安城、屋嶋城、金田城。ここまでは六六七年以前の築城記事があります。このあとは繕治や修繕の記事になっていきます。そして神籠石系山城の築城はいつかという論争が続いています。朝鮮式山城より古いんだ、新しいんだ、一部重なっているんだという論争が続いています。さらに瀬戸内系のものに関して、北部九州系のものとは、やはり違うんじゃないか、区別すべ

(二) 古代山城の終焉とその変容

古代山城の停廃記事

ようやく古代山城の終焉とその変容という話にたどり着きました。まずやめるお話です。大宝元年、七〇一年の高安城の廃城。それから烽、のろしを七一二年にやめる。そして七一九年に備後の茨城・常城を停止します。ということで、少なくとも八世紀の初め頃には、これらの山城はやめるということになっていると思います。記録でも考古学的資料でもだいたいそういう年代観です。当然ちよつとずれもありますが。

その中で宗教的施設を作るものがあります。大野城では、新羅が悪いことをしているので懲らしめるということで、四天王の塑像を四体造るという話が出てきます。これは七七四年です。その後、八〇一年に大野山寺の四天王像を筑前金光明寺（筑前国分寺）に下ろします。そうしましたら疫病が流行ったので、よくないからといって戻したという話があります。そしてこの時に「大野城の鼓峰に堂宇を建てて四天王像を安置する」とあります。このようなことが八世紀の後半から九世紀の初めの頃に大野城の中で起こっています。

それから、基肄城に関しましては八世紀の後半、先ほど見ていただきましたが、「山寺」と書いた墨書土器が出ています。これに関して小田先生は、よそから持ってきたのではないかということもおっしゃっています。それも当然あり得ますが、素直に、基肄城の中に山寺があっても構わないのではないかと思っています。何年前かに基肄城にお邪魔して、基山町の田中さんにご案内いただき、基肄城の近くに古いお寺さんとかお宮さんはないですかっていいましたら、連れて行ってくださったのが荒穂神社です。基肄城の南側約一



写真28 荒穂神社（『延喜式』式内社：860年）



写真29 石城神社（『延喜式』式内社：867年）



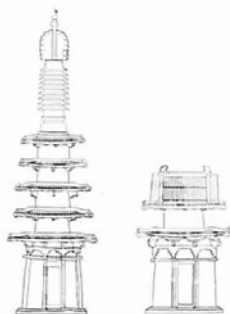
写真30 屋島寺

キロの所にあります。『日本三代実録』の貞観二年、八六〇年のところに、従五位上の荒穂天神を正五位下とするという記録がきちんとあります。そして基肄城に登った時に教えていただいたんですが、あそこが一番高い所の近くに、もともとあったんだということをおっしゃっていました。ですから、基肄城の山頂部にもかしいたら小さなほこらのようなものがあつたかもしれませんね。

それから、高良山は、高良大社の話ですよ。それから、周防の石城山も有名な話です。高良の神、石城の神ですね。それぞれ従五位下、従四位下の位をもらっています。石城の神のほうが、ランクが高いですね。少なくともお宮さん関係はこのように記録が残っています。

●瓦塔

瓦塔とは焼き物で作った仏塔で、本来木造建築である三重塔や五重塔の代替えとして、仏教信仰の対象として作られたもの。従来平安時代のものが多く知られているが、最近では7～8世紀のものも知られる。今回の出土は、城内で仏教信仰のシンボルとして用いられたものと考えられ、文献に残る他の山城同様、築城に百済人が関わり、彼らの信仰の象徴としてもたらされた可能性も指摘されている。



瓦塔図 (『埼玉県児玉郡美里町東山遺跡出土瓦塔・瓦堂解体修復報告書』(埼玉県教育委員会 1993)より)



図30 備中鬼ノ城・瓦塔 (岡山県立博物館2010)

屋島に関しましては正確には分かっていますが、土器は九世紀頃のものが出てきます。弘法大師との関係でよくいわれていますが、その関係は分かりません。少なくとも古いお寺さんはどうもありそうだと思います。

これは基肄城の麓の『延喜式』式内社の荒穂神社です(写真28)。上に見える山が基肄城だと思います。それから、これが石城神社です(写真29)。これはかなり昔に撮った写真ですが、こんな感じで厳かな感じで残っていました。これは屋島寺です(写真30)。現在、屋島の観光の中心の一つになっています。

鬼ノ城に関しましては、発掘調査をしました。中でこのような瓦塔が見つかりました(図30)。この瓦塔に関しては、年代決定は難しいのですが、関東で瓦塔を研究されている池田

敏宏さんからこの造り方だったら関東では八世紀まで上るよと伺いました。それでこれをどう理解するかは難しいところですが、ひとまずこういう仏教関連遺物があつたことがわかります。それと先ほど述べました管理棟と推測している礎石建物の横で、平安時代前期の仏堂と想定される遺構が見つかりました。その柱の穴から隆平永寶が出ています。最初に鑄造されたのが七九六年ですので、それよりあとなのでしょうが、平安時代前期ぐらいの仏堂があつたのは間違いないと思われます。

その後、鬼ノ城の近くには新山寺というお寺が出てきます。一〇七一年に成尋^{じょうじんあじやり}阿闍梨が備中国新山別所に行つて修行をしたという場所がここだろうといわれています。これは国文学の世界で、『成尋阿闍梨母集』でしたか、そういう記録があつて、この人が中国に行く時にここで修行をしたという話です。ということで、この時期には新山寺はあるんだろうと考えられます。現在、鬼ノ城の入り口近くに、大きな鬼の釜といわれているものがありますが、その近辺になります。

以上が、古代山城が宗教的施設に変わった、または古代山城のなかに宗教的施設ができた例です。

古代山城の変容―使用され続けた古代山城―

次に、古代山城が八世紀以降も使用された、大野城、基肄城、鞠智城についてお話しします。考古学的には八世紀前半以降の軒先瓦があると年代が分かりやすいんですが、軒先瓦を使うということは格が高いということを示していると僕は思っています。継続的に、七世紀後半の瓦、八世紀前半の軒先瓦がでる山城は大

野城と基肄城です。

あとで赤司さんのお話に出ると思いますが、礎石建物の倉庫群との関連も出てきます。先ほども言いましたように、いろいろな記録が大野城にはありますが、天長三（八二六）年の太政官符の中で、衛卒の仕事の中に大野城の修理というのがあるよと書かれています。ですから、この時期、大野城はきちんと維持管理されていますねということになります。それから、そのあと、『続日本紀』の八四〇年の条に、大野城の管理者の一人である大主城一員を廃したと書かれています。その後八七六年の記録が大野城に関する最後の記録で、考古学資料も大体この辺で終わるといわれています。

大野城に関しましては、皆さんよくご存じのとおり、この場所ですね。これが水城で、これが基肄城で、そして最近土塁が見つかったのが阿志岐山城跡近くです。大野城の中にはこのような掘立柱建物と礎石建物が見つかっています。大体七世紀代は掘立柱建物で、八世紀に入る頃に礎石建物に変わり、その後ずっと礎石建物が倉庫群や管理棟として使用されたと考えられています。

大野城に関しましては、何年前でしたか、大雨で壊れた時に若い方が頑張つて、危ない崖の所などで発掘をしていました。その時の成果

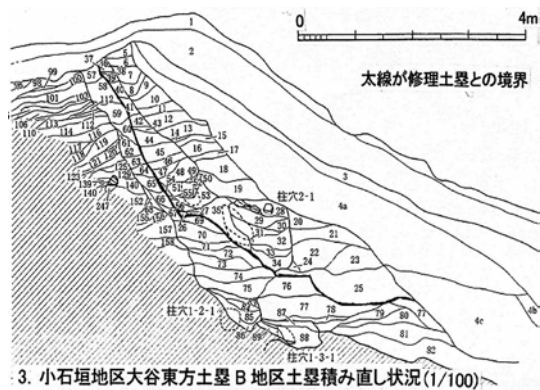


図31 小石垣地区大谷東方土塁積み直し状況（入佐・小澤2010）

の一つなのですが、この太い線の外側は明らかに修繕ですと報告書に載っていました(図31)。これを見ると何度か修繕しているんだろうなと思われる。つまり、土塁の積み直しをやっているだろうということです。

瓦に関しましては、最近、小田富士雄先生がまとめられて、細かな年代観を出されています(図32)。ひとまずこの左端のものを築城期と考えて、次に2、そして3が六九〇年代から七〇〇年代の初めぐらいとされています。

八世紀の前半まで下がりますと、瓦は大宰府政庁の造営と連動すると言われています。さきほど読みましたように大野城も八世紀前半にきちんと動いているという話になるという資料です。

それから、基肄城に関しまして、百済系単弁軒丸瓦が出ています。小田先生が七世紀後半とされている瓦です(図33-1・2)。重弧文軒平瓦(4)がセットで使用されています、最低でも七世紀末には礎石建物群があることになりました。そのあとに八世紀前半の老司系の瓦(3)も出ています、先ほど言いました八世紀後半の「山寺」土器(3)、そして九世紀までは継続して使用されているんだろうと思います。

それから『万葉集』の左注といいまして、ちよつと横に書いてある文章の

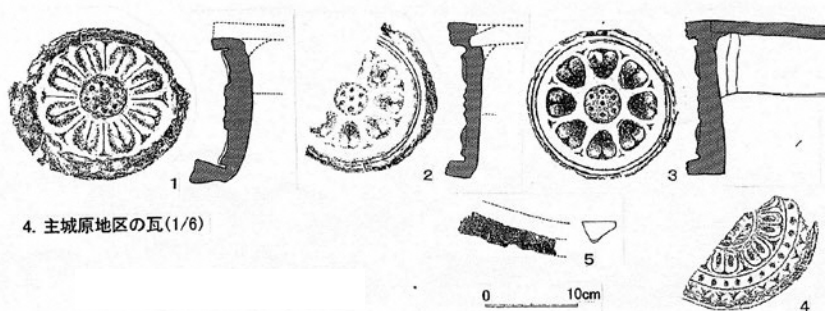


図32 大野城跡7世紀後半の瓦(横田・芳沢1979)

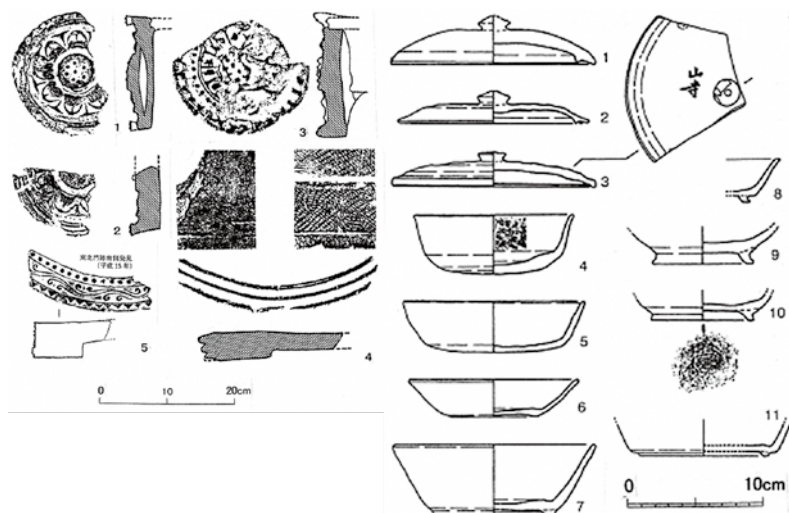


図33 基肄城跡の瓦と土器（7世紀後半～9世紀初）（小田2011）

中に「記夷城」という名前が出てきます。これは七二八年です。さらに、大宰府の前面の政庁に関連するところで、天平年間の土層から木簡が出ています。それに基肄城の稲「もみ」でしょうか。田中朝臣さんって人が動かしたっていう話が出てきます。左が木簡です。右がさきほどお話した軒瓦です。

この図面3が先ほどお話した「山寺」の墨書土器です。これはだいたい八世紀後半のものと考えて問題ないと思います。あと、これらの土器は九世紀ぐらいの可能性もあります。瓦も同様で、七世紀から八世紀のものがあります。

最後、鞠智城です。七世紀の後半から八世紀初めのところに、軒丸瓦が入っていることにちょっと注目してください（図34）。八世紀中頃はちよつと空白があつて、八世紀末に今度は平瓦と丸瓦がありますが、軒先瓦は出てきません。ちよつと性格が変わるのかなと思っています。土器に關しまして、先ほど言いましたように、木村さんがやった編年観でい

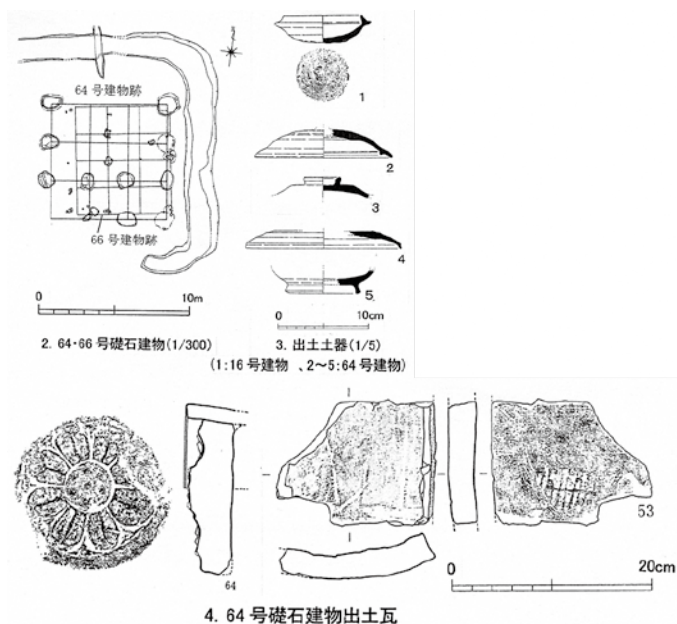


図34 鞠智城跡礎石建物と出土遺物（西住ほか2012）

いますと、八世紀の第2～3四半期の所が抜けています。八世紀の末に土器がまた出てきて、このあとの動きとまさに合っているんだらうなと思います。あと、記録の上で八七九年の記録が最後になります。

この七世紀第4四半期から八世紀第1四半期が先ほど申し上げたように土器が一番多い時期です。そういう意味で繕治の時期だと思っています。そのあとちょっと空白があります。この空白期、さきほども少しお話しましたが、八世紀の第2四半期になにも使用されていなかったのかといえますと、そこまで言えるかどうか分かりません。つまり、考古学の資料はそれが作られた時期

の話はできますが、そのあとどこまで使用されたのかということとはよくわかりません。ただ、その時期に作られたものが入っていないということは意味があるかと思っています。

これが版築です（写真32）。今日お話した堰板のことを意識しますと、この版築はいかがでしょうか。

中央で少し沈んでいる感じが
ちよつと気なりますね。そういう
意味でもう一度調査される時に、
こういう部分を意識して調査して
いただくと、何か違って見えてく
るのかなっていう気はします。

それからこの池はすごく大事だ
と思います（写真31）。今後もし
調査されるならば、この中を掘っ
てほしいです。そして、年号を書
いた木簡を出してほしいと思っ
ています。「秦人」の話もそうで
すし、仏像もそうなんですが、やはり貯水施設は、いろいろなものが入りやすい場所になります。

五・ おわりに

「おわりに」です。皆さんもうお分かりのことだと思いますが、日本列島の古代山城は六六〇年の百済滅



写真31 鞠智城跡貯水施設と「秦人」木簡・百済系菩薩立像
（熊本県教育委員会1999『グラフよみがえる鞠智城』）（岡山県2010）

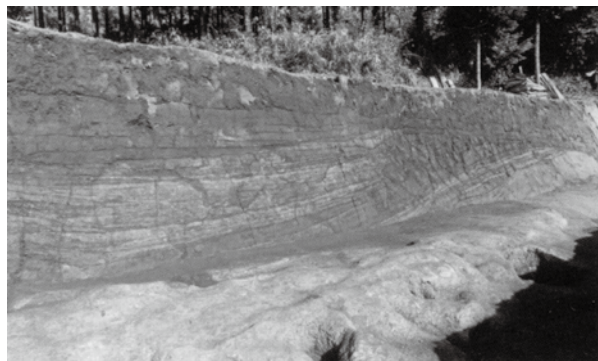


写真32 肥後鞠智城跡版築（古代山城サミット実行委員会2010）

亡、六六三年の白村江の戦いの敗戦を契機として築かれた。これはこれでいいと思います。朝鮮式山城と神籠石系山城に関しては、基本的に同じ古代山城ですが、記録の有無、それだけでなくて、土塁の列石の違いであるとか、建物の有無、遺物の多寡、そして完成・未完成などでもやっぱり多少違いがある。築城年代は七世紀の後半を中心とする年代ですが、その前後関係、重なりとの関係は今のところ僕も整理できていません。

築城目的はヤマト政権による対外防衛が第一義だと思います。そのあと変わっていく部分も当然あります。特に八世紀の初頭に止まって、その後、大野城・基肆城、そして鞠智城はちよつと様相が変わるのかなと思っています。これら三つの城は大きい意味では一緒なんです、細かく見ると違う可能性があります。そして宗教的施設に変わっていく。大野城もそうですが、鞠智城に関しても、これも矢野さんにご案内いただいた時に、下のお宮さんに連れて行ってもらいました。細かな時期はわかりませんが、鞠智城にもお宮さんあるんだなと思いました。

一一時四九分になりました。ご静聴、どうもありがとうございました。

〈おもな引用・参考文献〉

- ・ 赤司善彦 二〇一六 「鞠智城の建物景観の推移」『海と山と里の考古学』山崎純男博士古稀記念論集編集委員会
- ・ 明日香村教育委員会 二〇〇六 『酒船石遺跡発掘調査報告書』
- ・ 井上裕弘・宮小路賀宏 一九八四 『鹿毛馬神籠石』額田町教育委員会
- ・ 入佐友一郎・小澤佳憲編 二〇一〇 『特別史跡大野城跡整備事業Ⅴ』福岡県教育委員会
- ・ 岡田博・亀山行雄 二〇〇六 『国指定史跡鬼城山』岡山県教育委員会
- ・ 岡山県立博物館 二〇一〇 『鬼ノ城―謎の古代山城―』
- ・ 小川秀樹 二〇〇六 『史跡御所ヶ谷神籠石Ⅰ』行橋市教育委員会
- ・ 小田富士雄編 一九八三 『北九州瀬戸内の古代山城』日本城郭史研究叢書一〇、名著出版
- ・ 小田富士雄編 一九八五 『西日本古代山城の研究』日本城郭史研究叢書一三、名著出版
- ・ 小田富士雄 二〇一一 「基肄城跡」『基山町史』資料編、基山町史編さん委員会
- ・ 小野忠熙 一九八三 「石城山神籠石」小田富士雄編『北九州瀬戸内の古代山城』名著出版
- ・ 加藤史郎 一九九五 「播磨・城山」『古代文化』四七・一一、古代学協会
- ・ 金田善敬・岡本泰典編 二〇一三 『史跡鬼城山2』岡山県教育委員会
- ・ 亀田修一 二〇一四 「古代山城は完成していたのか」熊本県教育委員会編『鞠智城跡Ⅱ―論考編―』
- ・ 亀田修一 二〇一五 「古代山城を考える―遺構と遺物―」岡山県古代古備文化財センター編『古代山城と城柵調査の現状』平成二七年度全国公立埋蔵文化財センター連絡協議会第二八回研修会発表要旨集、全国公立埋蔵文化財センター連絡協議会

- ・ 亀田修一 二〇一八 a 「日本列島古代山城土塁に関する覚書―版築・堰板について―」『水利・土木考古学の現状と課題Ⅱ』大韓民国ウリ文化財研究院
- ・ 亀田修一 二〇一八 b 「繕治された大野城・基肄城・鞠智城とその他の古代山城」『大宰府の研究（大宰府史跡発掘調査五〇周年記念論文集）』高志書院
- ・ 木村龍生 二〇二二 「第Ⅵ章 第一節（一）鞠智城跡出土の土器について」『鞠智城跡Ⅱ』熊本県教育委員会
- ・ 木村龍生編 二〇一五 『鞠智城跡出土土器・瓦の生産地推定に関する基礎的研究』熊本県立装飾古墳館分館歴史公園 園鞠智城・温故創生館
- ・ 九州歴史資料館 一九九八 『大宰府復元』
- ・ 草場啓一編 二〇〇八 『阿志岐城跡―阿志岐城跡確認調査報告書（旧称 宮地岳古代山城跡）』筑紫野市教育委員会
- ・ 草場啓一編 二〇一一 『阿志岐城跡Ⅱ―阿志岐城跡確認調査報告書総括編』筑紫野市教育委員会
- ・ 古代山城研究会 一九九六 「讃岐城山城跡の研究」『溝漣』六
- ・ 古代山城サミット実行委員会 二〇一〇 『古代山城サミット展示会 あつまれ!!古代山城』
- ・ 猿渡真弓 二〇一三 『女山神籠石』みやま市教育委員会
- ・ 末永浩一 二〇〇三 『唐原神籠石Ⅰ』大平村教育委員会
- ・ 末永浩一 二〇〇五 『唐原山城跡Ⅱ』大平村教育委員会
- ・ 鈴木拓也 二〇一一 「文献史料からみた古代山城」『条里制・古代都市研究』二六、条里制・古代都市研究会
- ・ 須原緑 一九九八 『国指定史跡鹿毛馬神籠石』額田町教育委員会
- ・ 総社市教育委員会 二〇〇五・二〇一二 『古代山城鬼ノ城―展示ガイド―』

・ 田平徳栄 一九八三 「基肄城考」 九州歴史資料館編『九州歴史資料館開館十周年記念大宰府古文化論叢』上、吉川

弘文館

・ 出宮徳尚・乗岡実 一九八九 『大廻小廻山城跡発掘調査報告』岡山市教育委員会

・ 西住欣一郎・矢野裕介・木村龍生編 二〇二一 『鞠智城跡Ⅱ―鞠智城跡第八〇三二次調査報告―』熊本県教育委員会

・ 松尾洋平・谷山雅彦 二〇〇六 『古代山城鬼ノ城2』総社市教育委員会

・ 松川博一 二〇一八 「律令制下の大宰府と古代山城」『九州歴史資料館研究論集』四三、九州歴史資料館

・ 向井一雄 一九九九 「石製唐居敷の集成と研究」『地域相研究』二七、地域相研究会

・ 向井一雄 二〇一〇 a 「古代山城研究の最前線―近年の調査成果からみた新古代山城像―」『季刊邪馬台国』

一〇五

・ 向井一雄 二〇一〇 b 「駅路からみた山城―見せる山城論序説―」『月刊地図中心』四五三、(財)日本地図センター

・ 向井一雄 二〇一六 『よみがえる古代山城―国際戦争と防衛ライン―』歴史文化ライブラリー四四〇、吉川弘文館

・ 村上幸雄 一九九八 「鬼ノ城 南門跡ほかの調査」総社市教育委員会『総社市埋蔵文化財調査年報』八

・ 村上幸雄・松尾洋平 二〇〇五 『古代山城鬼ノ城』総社市教育委員会

・ 山元敏裕編 二〇〇三 『史跡天然記念物屋島』高松市教育委員会

・ 山元敏裕編 二〇〇八 『屋嶋城跡Ⅱ』高松市教育委員会

・ 横田義章 一九九一 『特別史跡大野城跡Ⅶ』福岡県教育委員会

・ 横田義章・芳沢要 一九七九 『特別史跡大野城跡Ⅲ』福岡県教育委員会

・ 渡辺正気 一九八三 「神籠石の築造年代」斎藤忠先生頌寿記念論文集刊行会編『考古学叢考』中巻、吉川弘文館

- 渡邊芳貴・半沢直也 二〇〇五 『永納山城跡』 西条市教育委員会
- 渡邊芳貴 二〇一二 『史跡永納山城跡Ⅱ』 西条市教育委員会
- 渡邊誠 二〇一八 「古代山城築城とその後」 考古研究会岡山例会シンポジウム資料